

鷹野(以下T)—— 僕と山本さんとは一般的にはかなり違う仕事しているように見えるかもしれませんが、もしかしたら非常に近いのではないかと思っています。山本さんは「レンズの前にあるものしか写せない」ということをおっしゃっていますが、まずはこの点が共通しているのではないかと思うのです。このことについてお考えを聞かせてください。

山本(以下Y)—— 撮っているものは、全く違うのですけれどね。でも、今鷹野さんが言ってくださったように、写真が立脚しているのは、科学的な世界観ですよ、ね、光学と化学と物理学と…。僕が全く信用できないのは、例えば、作家のポートレートとかを撮っていて、「内面が写っている」とかというようなこと。あれは嘘ですよ、ね。

T—— 嘘ですよ。実は僕もその話をしようと思っていたのですが。

Y—— 写真を見る人が、そのように受け取るように光の加減とか、表情とかで演出することはできますよね。でも、そういう表情をしたその人しか写っていないんです。そこには内面は写っていないですよ。ただ、見る側の想像力に働きかけて「この人はこういう人ではないか」と思わせるように操作することは、撮るときにできるかもしれません。しかし、写っているのはただ単に外側にある表面だけです。

T—— 本当にそのとおりだと思います。内面を撮りたいといってポートレートを撮っている人がいたら、ちょっと怪しいですね。

Y—— 表面だけを真摯に撮ればいいのであって、そこにしか写真の真実はないと思います。

T—— そこから見る人が何を感じるかということは、別の問題ですよ、ね。

Y—— そうですね。写真を見る人の、これまでのどういう人生を生きてきたか、何を感じてきたかということで違いますからね。

T—— 撮影するときに、そこまで撮影者がコントロールするというか、作り込んでしまうというのは、非常に危険だし、暴力的でもある僕は思うんですよ、ね。

Y—— そうですね。見る人が、文学的に受け取るのはある部分避けようがないことですが、撮る側の態度としては、あくまでも表面だけしか撮らないということだと思います。

T—— 写真を撮るということにおいては、撮る側が既に優位な状況にあると思います。アングルを決め、光の具合を選び、そしてどの時点でシャッターを押すかを決めるというように、そこだけでも相当特権的な地位にあるのに、その上さらに内面まで組み込んでしまったら、その写真は撮影者のイラストレーションというか、その人の頭の中の吹き出しのようなものになってしまって、実際の被写体、対象との対話がなくなってしまうのではないかと常々思っています。対象を受け入れる謙虚さというと説教くさくなりますが、そのような姿勢が写真を撮るときにはすごく重要な要素だと思っています。山本さんの写真にはそれがきちんとあると感じていて、とても共感を持っています。

Y—— 僕が鷹野さんの写真を見て共感する部分も、まったく同じところですよ。

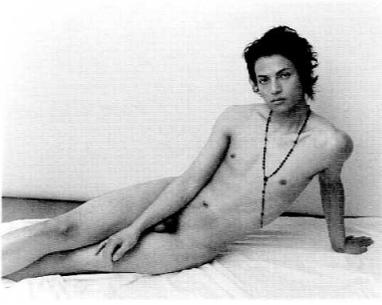


図1 鷹野隆大《両足を伸ばし、左手を床につけて起き上がり、へそまで届きそうなネックレスをつけている》シリーズ〈男の乗り方〉より
2006年(原画はカラー)



図2 鷹野隆大《赤い革のコートを着ている》シリーズ〈IN MY ROOM〉より
2002年(原画はカラー)

作をしていないというか、いわゆるテクニックも何も使っていないですよ。たとえばコマースの分野の有名な写真家が撮れば、もっと「上手く」撮れるのかもしれないですよ。けれど、そういうものを感じさせないで、ストレートにそのまま撮っている。だから写真に嘘がまったくないですよ。

T—— 僕としては、ある人が僕の作品を見たときに、撮影者が誰かというのではなくて、被写体と的那个人が直接向き合っているような感覚、実際には実物はそこにはないのだから錯覚なのでしょうが、そういう感覚をまず抱いてくれると嬉しいと思いつつ撮影しています。たぶん、そのような点も山本さんの写真と通じるのかなと思います。

Y—— それと、写真がとても生々しいですよ。そういう撮り方を計算しているのでしょうか、とても生々しい肉の感触というか、押せば引込むような感じがする写真ですよ。ある面ではとてもきわどい「エロ写真」に近いような感じも受けるのですが、それも計算して狙っている部分もあるように感じますね。とにかく生々しいですよ。テクニックが表に出てくるようでもなく、正面から光をあててシャッターを押しているというだけのストレートさを感じます。それと陰影がないですよ。強い陰を作らないようにしているのでしょうか。

T—— 光の問題というのはすごく重要だと思っています。山本さんも実は光というか、陰影があまり強くないところで撮っていることが多いですよ。光というのは、被写体とは別の要素、特に太陽光があたったときに、見る人には被写体に対する思いとは別に、太陽光のイメージ、印象、感覚みたいなものを、もうひとつ別の要素としてそこに付け加わってしまうので、同じ場所を撮っても、陽射しがある写真とない写真とでは別の写真になると僕は思っています。そういう意味で、なるべく光が前面に出ないように今までは撮影してきました。ただ、最近は少しそこから外れてきている部分はあります。

Y—— 現在、ユミコ・チバ・アソシエイツでの個展《Photo-Graph》2012.1.17 -2.29)で展示している最新の作品は、影を撮っているものですよ(図5,6)。それはどういう意図ですか。壁に映ったり、床に落ちたりしている何かの影ですよ。

T—— なんといいのでしょうか、昨年地震があって、その後どうも写真が撮れない時期が続いていて、それでも個展が決まっていたり何かやらなくてはならない状況で、どうすればいいのだろうという時期がやはりありました。そのときに足元の影がふと気になったことがあって、じゃあこれでも撮ってみるか、という感じで撮り始めたものが、今回の個展に出したものです。ピントが合ったり、合ってなかったりしてはいるのですが、スタートはまずは影を写そうとしたものです。影って何だろうと思いつつ改めて見てみると、すごく変なもので、動いている感じもリアルだし、もしかしたら物質なのかなあとか、思いつつ撮影していました。

Y—— 僕は、この人の影のようなものが気になって、すぐに連想したのが、広島



図3 藤野隆大 シリーズ《An Ignition Point》より
2010年(原画はカラー)

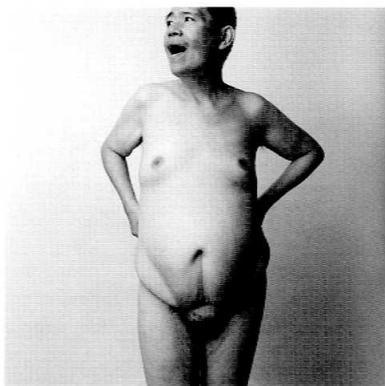


図4 藤野隆大 シリーズ《立ち上がれキクオ》より
2003年(原画はカラー)

